頑張ることの大切さ痛感

生活科学科一年
十亀　侑子

地域文化論を選択し、四月から歩き遍路の本番に向けて準備を進めてきました。白装束の製作もその一環です。男子も女子も、上手な人も苦手な人も、一針一針「ゴールするぞ」と思いを込めて仕上げました。

講義でも遍路の歴史や意義について学びました。モノの無い環境の中で自分を見つめ、他者と共感し、心や命を大切にする豊かな人間性を養う人づくりの道として、遍路道を歩くということを学びました。

参考図書から（一）四国八十八ケ所は、弘仁六（八一五）年弘法大師四十二歳のとき開かれた。（二）道程およそ三百六十余里、四十日から六十日の長路の旅である。この間に難所があって、苦行しなければならない。そのため強い意志が求められる。大師は常に遍路を見守り、ある時はとがめ、またあるときは救いの手を差し伸べる。（三）大師はいつの時代にも遍路の心の中に生きておられる…ということを心に刻んで歩こうと思いました。

いよいよ九月十六日朝。「生命・人間の尊厳の探求」を背に、一番霊山寺から歩きはじめました。リュックが重く、肩に負担がかかり疲れました。

二日目、藤井寺から焼山寺を目指し山道を歩きました。歩くペースが遅く、みんなに迷惑をかけてしまい、途中から車に乗ってしまいました。しかし、山道で大きなキノコやきれいな花を見つけ、日頃あまり気にとめないものが新鮮に見えました。

三日目、朝早くお勤めをし、出発しました。大日寺まで長い道のりでしたが、アスファルトに比べ、土の道は柔らかく足の負担が少ないと感じました。

四日目は先達を務めました。立江寺から鶴林寺までではとても長く、ペースが落ちてきましたが、お接待の温かさや先生、友達の励ましで最後まで歩ききりました。着いたときは、嬉しくて涙がでました。

五日目は最終日。絶対にゴールするという強い思いを胸に、鶴林寺を出発しました。太龍寺の鳥居に近づき「あと一つ。平等寺に着いたら、バスで帰れる」という友の言葉に、頑張りきることができました。「あと少し」と思うと嬉しく、友達との会話も弾みました。

平等寺に足を踏み入れたとき、嬉しさがこみ上げてきました。最後のお祈りをした後、泣いてしまいました。

この五日間、たくさんの人からお接待を受け、他のお遍路さんからも励ましの言葉をもらいました。人の温かさに、触れ合う幸せを感じました。

五日間は短いけど、歩いている時は長く感じました。しかし、一生懸命歩いていると、時間が過ぎるのを忘れていることもありました。「歩くことで時間が過ぎるのを忘れられる」ことに気がつきました。これまで、如何に時間に追われて生活してきたのか…。

現在は便利な交通機関がたくさんあり、歩く機会がどんどん失われています。私も「歩くなんて、しんどいだけ」と思っていました。しかし、歩き遍路の体験によって、いろんな発見がありました。人と人のふれ合い、助け合い、そして一生懸命頑張ることの大切さ。たくさんの人からたくさんのことを教わりました。全員が無事ゴールできてよかったです。皆に感謝します。

第54番延命寺で「遍路体験学習」の公開講座

着いた　感激、嬉し涙

明徳短大生の歩き遍路体験レポート（下）

地域ぐるみで「ぜんざい」のお接待。阿南市で

時間忘れ歩を運ぶ

盛り上げ役に徹したが…

幼児教育学科
野間　敬太

地域文化論を選択し、遍路のことを勉強した。学外の先生が話しに来てくれたり、お寺に聞きに行ったり、一日歩き体験をした。装束も自分達の手で作った。

当日、徳島に向かうバスの中で「僕は、この五日間みんなの前で、明るく盛り上げていこう」と心に決めていた。霊山寺に着くとテレビ局の人がいて「これから歩くんだ」と、改めて感じた。

一日目はコンクリートの上を歩くことが多く、ペースも遅く、予定の十番切幡寺まで行けなかった。宿に入り、明日の天気を見たら雨。みんな重い気持ちで一日目は終わった。

二日目はやはり雨だった。カッパを着て歩き始めた。少しすると雨は小降りになり、道はコンクリートから（土の）山道になった。山道は絶対にキツイ！と思っていたが、足への負担は少なく歩きやすかった。この日は反省があった。「自分たちだけのペースで歩いてはいけない」。

三日目、山を降りたり登ったり。足は少し痛かったが、元気だった。

四日目。国道を通り、自動車の排気ガスで喉が痛い。十八番恩山寺までが遠く、みんなの口数も少なくなる。ペースも遅くなり、先生から「時間に間に合わなくなるので車に乗るように」と言われた。僕たちは「絶対に車になんか乗りたくない」と思い、ペースを上げた。鶴林寺の麓で（十五分ほど遅れていた）先生が地元の人に聞いたら「まだ行ける」らしい。車に乗らず、歩くことになった。嬉しかった。みんな凄い勢いで歩き始めた。

最終日、先達という役目が待っていた。みんなの疲れは、見ても分かるくらいだ。ところが道を間違えてしまった。しかも班長というのは名前だけ、みんなにまかせっきりで、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

二時間以上遅れ、ついに二十二番平等寺に着いた。これまでの嬉しかったこと、辛かったことなどが頭の中を駆け巡る。まったく知らない僕たちにお接待してくれたり、優しく接してくれたり。

「みんなを盛り上げる」という目標が、「できた」と自信を持っては言えない。しかし、みんなと歩くことができてよかった。辛いこともあったけど、人の優しさにふれ感動した。一人では体験できないことばかりであった。